

# 日刊工業新聞

11月30日 曜日

2015年(平成27年)

## 日本の記述文化 素晴らしく

研究分野の論文や文献を読むことがほとんどだが、印象深い文学作品が2冊ある。その一つが紫式部の『源氏物語』だ。現在、がんの研究を故郷・沖縄に戻り行っているが、専門はウイルスの研究。1998年に豪州でウイルス分野の国際シンポジウムがあった。そこでインフルエンザの最も古い記述を持つのはどの国かという話になり、英国や米国、ロシアなども手を挙げ、各国を調べることになった。

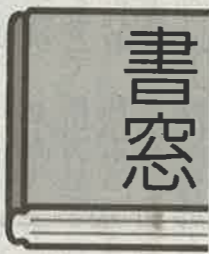
それ以前に日本のインフルエンザの歴史を調べたことがあり、江戸時代の元禄年間に流行した記録があった。だが、それよりも古い記述があるはずだと思

あつた文献が『源氏物語』だ。読み進めていくと「夕顔」で、源氏はインフルエンザにかかっている。そして亡くなった夕顔を思い、会えない悲しきで源氏が泣く様子が書かれている。

ウイルス学会で発表したが、そのような場で『源氏物語』について発表したのは、私くらいだろう。結局その時、各国で最も古い記述は私の発表だった。日本の記述文化は素晴らしいものだ。

もう1冊、文学作品で印象に残っているのは森鷗外の『山椒大夫』だ。94年ごろに出版社から、初めて本を書いてくれたいかと私に声がかかった。しかし、論文は書き慣れているものの、本の

## 『源氏物語』が発見したインフルエンザの最古



### 新作待ち遠しい

国立感染症研究所や世界保健機関(WHO)などで要職を歴任したウイルス研究の国際的権威。現在は沖縄の自生植物が持つ抗がん成分を研究している。根路銘氏は獣医(徳)

学博士号を持つっており、自著の執筆の参考に医師だった森鷗外の著作を選んだのは興味深い。同氏の研究成果とともに、新たな著作も待ち遠しい。(那覇支局長・三苔能)



くにあき 氏昭 根路銘

生物資源研究所 所長